たくみ
TAKUMI
No.022
平成20年6月●夏号
信州名匠会
（題字：故　池田三四郎　前名誉会長）

談話「信州名匠会　創立15年に寄せて」
会長 宮本忠長氏に聴く

職人の技、職人の輪
～信州名匠会の存在意義

信州名匠会の実績と今後への課題を語る宮本会長
（4月30日、宮本忠長建築設計事務所にて）

職人の技について、私は昔から「宮本軍団」とか「職人軍団」と言われて、技術をもつ職人と現場で一緒にやる努力をしてきました。私の設計の場合には、棟梁とか、左官とか、私が職人個人を指名して現場に立ってもらっていました。通称「宮本軍団」とも呼ばれていました。

あるとき、東京大学名誉教授の村松貞次郎先生から、長野県内の職人さんを「ものをつくる」という共通項で集めて、お互いに研鑽する場を作って継続してみては、というご助言をいただきました。職人、とくに同業者は普通、なかなか一緒にならないものです。初代会長をお引き受けくださった村松先生のお志と穏やかなお人柄のおかげで、広い長野県中からいろんな種類の職人の人たちが集まってくれ、ここまでやってきました。

会の名前は、村松先生に「信州名匠会」と名づけていただきました。会報は「たくみ」にしましたが、その題字は名誉会長の池田三四郎先生にお願いし、いまもこの会報の顔を飾っていただいています。村松先生はお亡くなりになるまで初代会長をお務めくださり、そのあと藤森照信先生が会長をお受けくださり、公務ご多用の藤森先生のあと、私が会長をお受けしています。「全国名匠会協議会」を目標に、『新建築』の吉田義男氏（当会顧問）のご尽力もいただいて山形、茨城などで名匠会の創設を働きかけましたが、いまだに実現を見ていません。この国に信州名匠会が存在すること、その意義の大きさを感じています。

会員内部では、理事者をお務めくださっている親方・サブコンのみなさんと、棟梁や左官といった職人の一般会員が、いいかたちでまとまっていただいています。若い後継者や社員のみなさんも参加しやすい雰囲気や企画を考えることが、今後の課題だと思います。

月例の研修会や研修旅行
～まちをつくる総合的な発想で

名匠会の創設から15年を経た今でも感じますのは、それぞれの職能同士、お互いの領域をあまりにも知らないということ。そして、ものをつくる志や姿勢がみなさんとても純粋であることです。現場の職人たちは、入れ代わり立ち代わりで、同じ家をつくっても、話しを交わす余裕も機会もありません。名匠会の毎月の研修会では、建築にかかわる多種多様な課題を取り上げています。そこに参加すると、「目からウロコが落ちる」感覚を抱くことが多いものです。職人の後継者育成など共通する課題を語り合う場にもなっています。建築設計に従事する設計士にとっても、現場の職人さんから直接学ぶことのできる絶好の機会です。「ものづくり屋」同士、情報や技術を交換する場になっていますね。

研修会や年に一度の研修旅行で、私がこれから一番テーマにしたいのは、「まちをつくるための総合的な発想」です。まちというのは、土地の気候や風土、産業の歩み、そして独特の歴史やしきたりがあります。これからの暮らしや住まいは、そういう背景を明確に意識して、考えていくべきだと思います。

建築から300年を経た住宅には、風土に見合う素材や伝統的な工法が施され、補強や修繕、日々の清掃などの、地道な養生の積み重ねが背景にあったのです。

近ごろ、国から「200年住宅（長期優良住宅）」が提唱されています。日本の住宅の平均寿命30年を6倍に伸ばすことで建て替えに伴って出る廃棄物を減らし、環境問題に対処しようという発想です。環境に関心を持つことは必須の課題ではありますが、その視点だけから単純に「200年」を目標にするのは、住宅やまちづくりの本質を見失っているのではないでしょうか。

見聞を広げ、親交の機会にもなっている研修旅行にて（平成19年度「静岡県の建築見学」より）

一軒一軒で一角がきれいになり、点が面になって広がっていくには長い時間がかかります。住宅とそのまわりの野菜畑、雑木林や山林などがバランスよく広がるコミュニティーを創造するような、息の長い構想の取り組みを、私たちが提唱して、実現させてはどうでしょうか。

ほんとうの日本の姿、そのまちの暮らしにとって一番いい住まいのあり方を、具体的にご提案できるような職人たちの集まりしていきたいものです。「いい」のものさしを、普通の人たちにもわかりやすく、説得力をもって提案できるプロ集団としての信州名匠会になっていきましょう。

平成20年新年会、34名が参加して抱負を語り合う

34名が参加した新年会場

信州名匠会は1月23日、長野市の四川楼で新年会を開き、34名が参加して懇親を深め、新年の抱負を語り合いました。受付では、会報「たくみ」の新春号（第21号）が配布されました。

席上、11月に入会された中島建築（須坂市）の棟梁・中島重雄氏から挨拶があり、参加者が拍手で歓迎の気持ちを表しました。

当会理事の村越久子さん（雪しろ窯）からは、教授を務める創造学園大学芸術学科（高崎市）に「棟梁コース」が新設されるという、うれしい報告がなされました。村越氏からは参加者全員に、高崎名物の縁起物「福だるま」がプレゼントされました。

挨拶する専務理事の坂田守夫氏（坂田工業㈱）

新入会員の中島重雄氏（中島建築）

乾杯の挨拶をする副会長の井内猛男氏（㈱井内工務店）

平成19年度理事会を開催

信州名匠会は4月10日、宮本忠長建築設計事務所にて平成19年度理事会を開催。次期総会の内容と役員改選を議題に語り合いました。

会員にきく
「たくみの仕事」Vol.15

電気と設備、両方の知識をもつ技術者を育てたい

㈱ライフエンジニアリング（長野市三輪）　代表取締役　樋口豊氏

昭和13年（1938）生まれ、69歳。三重県四日市市出身。平成3（1991）年、㈱ライフエンジニアリングを設立。

現場の土で作った花器や置物（手前）が並ぶ事務室にて

電気と管工事の1級施工管理技士の資格をもつ樋口豊さん。平成3年に設立したライフエンジニアリングは、樋口さんの腕と人柄を見込んで、仕事の依頼が絶えない。多くの建築関係者が「樋口さんに任せておけば安心」と話すなど信頼は厚い。

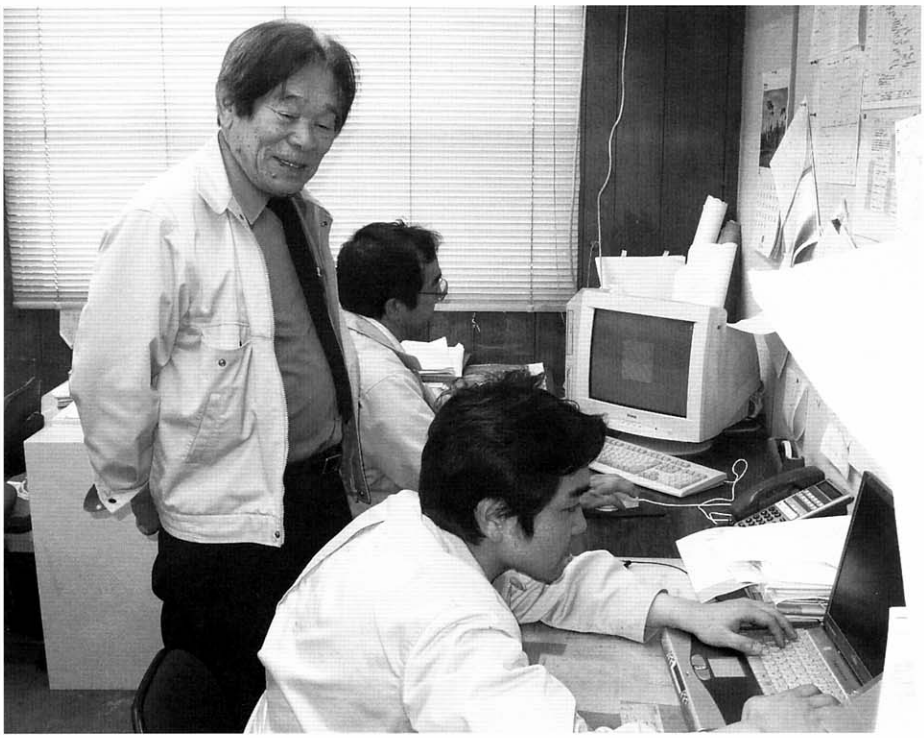
東京都内の高校を卒業し、電気工事の仕事に就いた。配線など電気工事の基礎を身に付けた後、大手建設会社の設備・設計部門を担う子会社に転職。転勤で全国各地を渡り歩き、昭和43（1968）年、長野に赴任した。軽井沢では、個別に変電所が必要なほどの電力を使う別荘の電気工事を手がけ、信州まつもと空港そばの「やまびこドーム」の空調や電気工事なども手がけた。

若手社員には、「見えないところをきれいにやれ」と指導する。「その心構えがあれば、必然的に見えるところもきれいになる」との考えだ。

電気と空調などの設備を別々の技術者が行うことに違和感を覚える。実際の仕事では、電気と設備の接点は非常に多い。空調などは電気の知識がないと設計できないし、知識不足で工事がうまくいかないこともある。数億円もする工事ならいざ知らず、数千万円の工事なら、人件費の面でも有効だ。

しかし、どちらの資格も、ひとつ取れば生きていくことができる国家資格。両方の資格を取ろうという人は少ない。取得を支援できるほど余裕のある会社も少なく、進まないのが現状だ。「少しずつでも、設備と電気、両方の知識をもった技術者を育てていきたい」。

建築工事現場から掘り出される土を使った焼き物の腕は、趣味の域を越えつつある。自宅に小型の電気窯を設置し、釜の温度や練り具合など、試行錯誤を重ねた。灯篭や郵便ポストなど、工事のモニュメントとして残す。「工事現場からはその場所ごとに違った土が掘り出される。工事の記念としてつくり続けたい」。



蓄えた知識と経験をもってどっしりと構え、動くときには機敏に指図を出し、現場にも飛ぶ。そんな樋口さんを、仕事を越えて慕い、頼りにする人は多い。

会員にきく
「たくみの仕事」Vol.16

人も良く自分も良く

㈱町田電機商会（長野市柳町）　代表取締役　町田幸一氏

昭和25(1950)年生まれ、57歳。昭和23(1948)年創業の㈱町田電機商会の代表取締役。

事務室の廊下には、基本理念「人も良く　自分も良く」、「凡事徹底信賞必罰」の額と、ミレーの「落穂拾い」の絵が掲げられている。

一般住宅から伝統建築、オフィスビルからハイテク工場まで、電気関係の設計・施工を担う町田電機商会。町田幸一さんは昭和23年創業の同社2代目として、17人の社員を引っ張る。基本理念は「人も良く自分も良く」。仕事を通じて出会う施主や、工事関係者の幸せを願い、社員には「プライベートも充実させてほしい」と話す。さまざまな会社の社是や理念を研究し、たどり着いた。

「電気工事の仕上がりは良くできて当たり前。お客さんとの関わりが大切」との考えで、協力会社にもマナーの徹底を指導する。現場で職人がそのまま営業マンにもなる業界。仕事のあとのコミュニケーションが顧客満足につながる。

昭和48（1973）年、長野工業高校の電気科を経て学んだ日大理工学部を卒業。電気関係の会社に入社した。父好美氏の背中を見て育ったため、「後を継ぐのは当たり前。疑問はなかった」という。しかし、入社と同時に父好美氏が他界。3年ほど他の企業で勉強するつもりが、1年もたたずに町田電機商会に入社することとなった。町田さんは、「チャレンジ精神旺盛な人だった」と亡父を振り返る。同社の創業当時は戦後の混乱期。電気工事は始まったばかりだった。「当時まだ珍しかったオートバイを乗り回すなど新しいものや派手なことが好きだった」という。

創業から、今年で60周年を迎える。「ザ・フジヤ・ゴホンジン」（旧御本陣藤屋）など、老舗旅館とは先代からの付き合い。昨年の改修では、文化財としての価値を損なわないように細心の注意を払い、電気配線を組み上げた。顧客満足を第一に、日常生活や生産活動に不可欠な電気の安定供給に取組む。

「この仕事は、完成した姿は既製品が表に出て、仕事の質は一見してわかりにくいものです。それだけに、想像力を三次元で働かせて、見えない部分をきれいに、確実に、安全・迅速に仕上げます。見えない部分を積み重ねて、信用と実績を積み重ねていきます」。

若い社員と、現場へ向かう前の打ち合わせ。「仕事は連係プレーです。仕事を終えたら、現場の責任者の方に『終わりました。これでよろしいですか？』と声をかける。それだけで、信用につながるものです」。

定例研修会●Report

（平成20年2月～4月）

平成19年度　第6回研修会
「火災予防の知識」

平成20年2月28日（木）
講師：髙橋弘之氏（長野市消防局予防課　原因調査係長）
「火災の教訓」
講師：高梨廣男氏（長野市、（有）高梨建設、当会会員）
参加者：27名

素人配線は絶対にやめて

髙橋氏からは、統計的な出火原因として「不注意」が最も多いことが指摘されました。住宅火災では、コンロやストーブ、タバコが主な火元であり、冬季と春先の乾燥状態における焚き火の火の広がりも原因の上位を占めています。建設産業に関係する原因としては、電気配線からの出火もあとを絶ちません。「素人配線は絶対にやめるように」と強調されました。また火災の発生をいち早く知らせてくれる住宅用火災警報器などの設置が義務化についても確認されました。

「火災を起こさないために」と留意すべき点として髙橋氏は、次の2点6項目を挙げられました。

1　注意力を高めること
　○異常を感じる心
　○点検のすすめ
　○整理整頓
2　安全性の高い器具を使用すること
　○過熱防止装置、立ち消え安全装置付きガステーブル
　○反射式よりファンヒーター式暖房機具
　○オール電化（IH、電気暖房）
　　…出火しないわけではないが。

終了後、長年当会の事務局を務めていただきました市村友慎さんが宮本忠長建築設計事務所を退職することに伴って退任されるため、長野市内の料理店を会場に「送る会」が開かれ、20人が市村さんの労をねぎらい、新しい門出を激励しました。

平成19年度　第7回研修会
「竹は無限、無限の竹」

3月28日（金）
講師：小出九六生氏
（竹工芸処の竹連峰苑　小出竹材店相談役、竹工芸家）
参加者：29名

竹に宿る無限の可能性を引き出す

竹は人の心を惹きつける日本を代表する植物。趣深く、老若男女問わず親しみをもっています。子供のころ、誰もが竹馬や竹とんぼで遊び、スキーやスケートの道具としても竹は重宝されました。

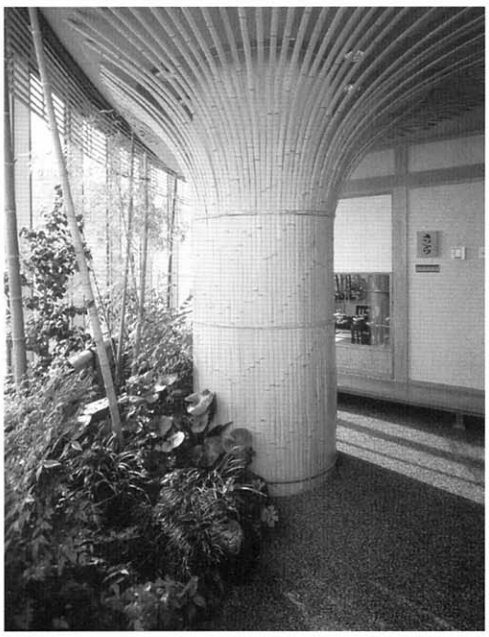
昭和9（1934）年、まさに「竹がなければ日常生活が成り立たない時代」に生まれた小出さん。竹工芸家だった父親の仕事が見える位置にいつも座り、手から生まれる様々な工芸品に魅了されました。鍛冶屋や下駄屋など、職人たちがまちにあふれていた時代は、昭和30年代になると一変します。プラスチック製品が出回り、生活様式が変わる中で、生活に密着した職人が姿を消していきました。

「私が今まで竹工芸家として仕事を続けることができたのは、農業が盛んだったことが挙げられます。ビニールハウスのフレームなどに使ってもらえたことで、なんとか竹垣や工芸品作りをやめずに続けることができました」。

竹が再び脚光を浴びるようになったのは、つい最近のこと。環境問題の高まりとも関係しています。再評価され、小出さんはなおさら「竹」に夢中です。

「息子が3代目を継ぎ、孫も4代目を継いでくれるという。誰にもできないもの、機械ではできないものを創れといい続けています」。

小出さんは新たな試みとして、竹を綿（わた）にできないかと考えています。断熱材として使う方策



宴席油や（長野駅前）ロビーの作品「歓喜」

を学識経験者らとともに研究し、実現性を探っています。日本文化に深く根付く「竹」は無限の可能性を秘めています。

小出さん著『竹は無限　無限の竹』（オフィス・エム刊）「竹の世界に魅せられて」(P2)より抜粋して、小出さんの想いをご紹介します。

「使い捨ての工業製品は、土に戻らないゴミの山を生みだした。今やゴミは地球規模の問題だ。一方、先祖伝来、多くの恵みを私たちに与え、育ててくれた里山が荒れていく。ご多分に漏れず、あの美しい竹林が、見るも無惨な竹薮と化している。なんとかできないものか、と関係者から相談を持ちかけられることが少なくない。竹林の整備事業に協力する機会も多くなった。

よろづや（山ノ内町湯田中温泉郷）の露天風呂から見た「連峰垣」

竹ほど便利に利用できる素材はない。便利なだけでなく趣もある竹。こんなにすばらしい素材はほかにないとさえ思う。なのに、現代人は、その活用方法を忘れてしまった。竹も他の樹木同様、風景として遠景になってしまうのか、と半ば絶望していた時期が私にもあった。しかし近年、竹薮化する竹の活用が試みられるようになり、話題を呼んでいる。竹炭、竹酢液、竹紙、竹繊維……そして、世界のあちこちで地球規模の環境の緑化・浄化を考え始めた学者が登場してきたことも明るい材料である。

竹は、日本を代表する植物。日本人の文化や暮らしも竹なしでは考えられない。伐れば伐るほど育つ竹……。竹は、まさに無限の可能性をもった最高の生活素材、芸術素材でもある。」

平成19年度　第8回研修会
「雪しろ窯　陶芸教室」

4月26日（土）
講師：村越久子氏（上田市武石、雪しろ窯主宰、信州名匠会理事）
参加者：20名

雪しろ窯の暖かなお部屋で村越氏（右奥）の歓迎を受け、昼食をいただきました。

村越久子氏（創造学園大学芸術学部教授）のご指導のもと、「雪しろ窯」にて恒例の陶芸教室が開かれました。花冷えの日でしたが、薪ストーブといろりの火で暖められた屋内で、まごころのこもった昼食をいただいて、一同は大喜び。身も心も温まったところで、制作に取り掛かりました。すでに何回も参加している人が多く、事前に構想を練ってきて、傾きの入った花器や、帯状にした粘土を編んで籠のように仕立てた作品など、大作が仕上がっていきました。6月25日の総会会場では、参加者の作品が展示されます。

ご指導をいただいて、思い思いの作品を仕上げる参加者たち

会員の動向（平成19年7月以降、平成20年6月現在。敬称略）

【入会】個人会員：中島重雄・中島建築・建築大工・須坂市南小川原690-6
【賛助会員　担当者の変更】㈱山翠社・木製建具・家具：前任・池内信二　新任・松木和善
㈱角藤　長野本部・鉄骨加工：前任・風間洋二　新任・長澤和芳
【社名の変更】新社名・落合コンサルティング・落合一視・土木コンサルティング（旧社名・畑八開発㈱長野事務所）
【退会】個人会員：塚田廣実・塚田住建・建築工事・長野市戸隠豊岡6296
永井竜雄・永正建築・建築工事・小布施町押羽645
佐藤啓三・（有）佐藤建設・中野市桜沢352-1

たくみ No.022
［信州名匠会ニュース］
発行日：平成20年6月25日
発行者：信州名匠会　会長　宮本忠長
編集者：信州名匠会事務局
制作協力：文屋、（株）新建新聞社
連絡先：（株）宮本忠長建築設計事務所
事務局：西澤広智・嶋本耕三・川向涼子・岸本貴志・大田達也・木下豊
〒381-0012　長野市柳原1875-1　TEL：026-241-5510　FAX：026-243-0187